第2回文京区アカデミー推進協議会分科会（国際交流分野）
議事要旨

日　時	平成27年6月25日（木）　18：30～20：30	
会　場	文京シビックセンター　1001会議室	
委　員	会　長　　久松　佳彰	（東洋大学教授）
	委　員　　森岡　隆	（文京区国際交流フェスタ実行委員会　委員長）
	委　員　　三谷　規子	（文京区青少年委員会）
	委　員　　金坂　吉雅	（区民公募委員）
	委　員　　黒木　美芳	（区民公募委員）
	委　員　　佃　吉一	（公益財団法人アジア学生文化協会　常任理事）
	委　員　　増田　純	（区民公募委員）
欠　席	委　員　　鈴木　秀昭	（東京商工会議所文京支部　事務局長）
事務局	矢島　孝幸	（アカデミー推進部観光・国際担当課長）
	熱田　直道	（アカデミー推進部オリンピック・パラリンピック推進担当課長）
	増田　一昌	（アカデミー推進部アカデミー推進課国際交流担当主査）
	支援事業者　株式会社創建　氏原・本多	
資　料	国際交流分野における課題	
	第2回分科会の進め方について（国際交流）	
	地域における多文化共生推進プランン（平成18年3月　総務省）	
	東京都外交基本戦略【骨子】（平成26年12月 東京都）	
	第2回文京区アカデミー推進協議会分科会（国際交流分野）議事録	

議　事

1．開会・座長あいさつ

座長より開会のあいさつが行われた。

2．流れの確認等

事務局より「第2回分科会の進め方について（国際交流）」をもとに、分科会の流れが説明された。

3．議題

事務局より前回のワークショップのふり返りが行われた。

久松会長	佃委員は前回欠席されたが、振り返りにあたってご意見はあるか。
佃委員	公益財団法人アジア学生文化協会には留学生が400人いる。長期的にみると留学生は母国に帰国してしまうが、日本で就職を希望する人が増えている。また、海外の大学を出た日本語ができる人の中でも、日本での就職を希望している人が非常に増えている。海外から来て日本の大学に進学する人は毎年8,000人くらい、専門学校へ進学する人も毎年8,000人くらいいる。そのうち半分くらいの人が日本での就職を希望している。専門学校を卒業しても制度的な問題等から就職ができないというケースもあるが、基本的に5

年、10年というスパンでは、大学や専門学校を卒業した人は、日本にいるということも考えていきたい。ただ、就職先は文京区内に限らないので、移動するということも踏まえていかなければいけないが、在留を希望しているという点で意識しておいてほしい。

久松会長　本日欠席の鈴木委員から言付かっていることはあるか。

事務局　3点ある。まず、留学生に関わる事業に日本人も関わっているということが重要なのではないかという点である。留学生が日本の事を知る過程で区民の方が外国人と交流し、国際感覚を養い、区民のレベルから取り組んでいくという視点が大事なのではないかというご意見であった。次に、グローバル人材の育成についてだが、現地でOJTで経験を積んでもらうことも大事だと考えており、教育に落とし込んでいけるかは今後も考えていきたいとのご意見であった。次に、留学生の方に日本を知ってもらおうとした時に、文京区を知ってもらうということはギャップがあるのではないかという点である。海外の方には、日本に住んでいる、東京に住んでいるということまでは意識できるかもしれないが、文京区に住んでいるということは意識できないのではないかというご意見であった。能楽堂、湯島天神など文京区の資源を使ってもらい、結果的に文京区を知ってもらうという流れが望ましいのではないかというご意見であった。

4. 分野における課題

事務局より国際交流分野の課題が説明された。

5. 座談会

久松会長　まずは各委員からご意見をいただきたい。

森岡委員　課題のまとめで挙げられた内容を基にして今後議論をしていきたい。タイトな日程なので、行動に移す、スタートするということを大事にしていきたい。

三谷委員　これまでの取組みを具体的に発展させるための議論をしていきたい。特に、地域の人たちとどう行動するかという視点で考えていきたい。

佃委員　発信能力が高い留学生に対して、東京の中でも、文京区の認知度は高くないと感じている。教育、まちづくりに取り組みながら、区民との交流につなげていければよい。しかし、区民の中でも、外国人を受け入れる体制がまだ十分でないとも感じている。うまく雰囲気、体制をつくっていけるとよい。

事務局　現行計画の体系について基本的な方向はよいと思う。しかし、若干取組みの方向性がかぶっているものもある。うまく整理してスムーズに事業を展開できる施策体系を検討していけるとよい。

オリンピック・パラリンピックが国際交流のチャンスになっているとのことだが、本当にチャンスになるかどうかは、それまでの土台づくりが重要だと考えている。課題のまとめの中でも、特にマインドの醸成という視点が重要だと感じている。留学生は日本にいる期間が限られているということもあるが、雰囲気づくりの中では一緒に取り組んでいくことも重要だと考えている。

ホストシティ・タウン構想についても、日韓ワールドカップの時に大分県中津江村とカメルーンがキャンプの受け入れで交流が始まったという経緯がある。オリンピック・パラリンピックについても事前キャンプがあり、本番前に各国の選手を受け入れる機会がある。その際に文京区がうまく動いていけるとよいと考えている。

黒木委員　具体的な話をすると「それをやりましょう」という話になってしまう。国際交流は区が旗を振って大きな流れをつくるとよいと思う。国際交流は区民で既に取り組んでいる人がたくさんいる。そういう人を区が探してはどうか。区民レベルで国際交流を楽しめる環境づくりを区が率先して取り組めれば、マインドの醸成につながると考えている。

森岡委員　区民で既に取り組んでいる人がたくさんいる。うまくそういう人を巻き込んでいける取組みを一歩ずつ進めていけるとよいと考えている。

金坂委員　国際交流を担う人材の育成について、企業でも取り組んでいるところは多いが、そういう会社ほどグローバル化が進んでいなかったりする。人材育成を目標に掲げるのではなく、国際交流を推進するプロセスの中で人が成長していくものだと考えている。

事務局　現行計画の分野別の目標について、区民向けの施策と外国人向けの施策が混在し、施策の対象はぶれているものがあると感じているので、うまく整理できるとよい。

黒木委員　区民向けに絞れば、ぶれなくなるのではないか。

事務局　区民に向けた国際理解の機運の醸成といった取組みと同様に、文京区に来た外国人に向けた国際理解の取組みも重要だと考えている。施策の体系としてもう少しわかりやすく整理できると感じている。

国際交流は最終的な目標ではなく、交流を基に教育や国際的な協力関係の構築、ひいては文京区全体のプレゼンス向上に結び付けばよいと考えている。分けていること自体が課題という考え方もあるかもしれない。

オリンピック・パラリンピックについても、一つの契機として捉える事も大事だと考えている。また、前回質問にもあったが、行政間交流についても海外の姉妹都市などと、東京都の都市外交戦略までいかないにしても、考えていく必要があると認識している。

黒木委員　オリンピック・パラリンピックを契機とするとのことだが、それがなかったら交流しないのか。特別に焦点をあてなくてもよいのではないか。

事務局　仮にオリンピック・パラリンピックがなかったとしても国際交流に取り組むが、一つの契機として捉えている。

黒木委員　オリンピック・パラリンピックに関係なく既に取り組んでいる人を支援していくことを重視してほしい。

久松会長　各委員から意見が出されたが、追加の視点、新たな視点で意見はあるか。

黒木委員　文京区には国際交流に取り組んでいる区民はたくさんいる。しかし、そういった人たちは視野が広いので文京区という視点は持っていないかもしれない。区が既に取り組んでいる人をサポートして、取組みを広報していけば、他の区民の意識はすぐに高まるのではないか。ケーブルテレビなどで周知

し、一緒に遊ぶことでも国際交流であるということを周知していければよいと考えている。そうすれば「私もやろう」という人が増えるのではないか。

久松会長　既に取り組んでいる人を取材して情報を発信して、見せていくという意見である。現行の施策を見ると、受け入れる体制・マインドは既にできているということで、整理したい。

三谷委員　現行計画の施策体系をよりシンプルにするという意見は賛成である。今区では、このパートに関わる人は何人いるのか。人数に対してキャパシティが超えていたら、できることも半端なことになってしまってもったいないと感じている。

久松会長　常時1.5人体制とのことである。施策の体系は、よりシンプルにできると個人的にも考えている。

話は少し飛ぶが、この会議で施策の枠組みの話をするのはスケジュールを見ると時間がもったいないので、中身の話をしていきたいと考えている。中身を提示し区にお願いをして、現行の体制で難しければ取組みを軽減するなり、人員を補てんするなり対応してもらいたいと考えている。体系については事務局でシンプルにしたものを提示してもらい、この会議の案がそこにつなげられるかを検討していきたい。

例えば、先ほどの意見にもあったが、学生の国際交流サークルが、既に交流を行っている区民を取材して、情報発信をするコーディネートを行うという取組は、行政を通さなくてもできることかもしれない。まずは、夢のようなことでもよいので意見を出し合っていきたい。

「交流」という言葉が、敷居が高くて気遅れさせてしまうという意見があったが、例えば国際交流の機運を醸成していく時には、どういう方向性が考えられるか。意見はあるか。

黒木委員　気遅れするということに関係するが、単に外国人の友達を家に招くだけでも国際交流だとういうことを発信・周知していくことが、必要だと考えている。区は、そういう人を支援していくことが大事なのではないか。

事務局　区内で活躍している方を取り上げる、事業を拡大していくということは考えていきたい。

久松会長　区内のさまざまな取組を情報共有していくことは、重要である。

三谷委員　子どもの国際理解教育について、学校で国際理解をテーマとしたコマが今は道徳に変わっており、機会が減っている。部活動のボランティア等で外国の方も入ってもらえるような、取組ができるとよいと感じている。また、留学生の多い学校が地域の活動にもっと参加すれば、盛り上がるのではないかと感じている。

久松会長　区役所の中では役割分担はあると思うが、橋渡しをすることを重視していくことが次のステップになると考えている。

事務局　教育に対してアカデミー推進課がどのように連携していくかということは大きな課題だと認識している。教育だけに限らず、他の関連する部署とも連携し取組を推進していきたい。他の部署では関係する計画を持っているので、すぐに連動することが難しいかもしれないが、うまく整合を図っていきたい。

三谷委員　　学校でのボランティアなどは、区民でない方もいるが、人材としてうまく一緒に取り組める方法を考えていきたい。区民が意識をしている地域の学校では、校長判断で取組が進んでいることもあるが、逆にそうでない地域では、何も始まらないということもある。

事務局　　学校長裁量で、地域によって異なるということが起きている。

三谷委員　　学校が動くと地域が動くということもある。

事務局　　学校の取組をテレビ等で周知していくことも大事かもしれない。いっぺんに制度を大きく変えることは難しいが、オリンピック・パラリンピック推進校という制度を活用し、まずはピンポイントで情報を落としていくという方法もある。さらに学校自体の取組みへの支援と合わせて、教育との連携をすすめていけるとよい。

オリンピック教育の一環として、国際理解、伝統文化の教育も力を入れて取り組まれている。外国人との交流となると難しいところもあるかもしれない。

三谷委員　　せっかく区内に大学等の教育機関があるので、うまく生かす方法を考えていけるとよいのではないか。

黒木委員　　例えば、食を通した国際交流などは取り組みやすいだろうし、さまざまな方法があると感じている。

久松会長　　「区が情報共有の強化の触媒になる」「教育との連携」という議論であった。ほかに意見はあるか。

佃委員　　手法として、2倍分の目標を掲げてはどうか。どこまで期待して頑張ればよいかということが見えてこない。いつもと違う5年間で支援体制を整えるということを区が言ってくれれば実現できることをイメージしていけると思う。

久松会長　　例えば都市外交については大きく推進するのは勇気がいることだと思うが、どうなのか。

黒木委員　　「国際交流倍増計画」のようなことを掲げ、各人が倍のことに取り組むという流れをつくり、先導できればイベント等も盛り上がるのではないか。

久松会長　　オリンピック・パラリンピックで自然と盛り上がる部分をさらに高めていけるとよい。また、他自治体に先駆けて行動できるとよいと考えている。

三谷委員　　オリンピック・パラリンピックの事前キャンプもうまくできるとよい。

事務局　　まだ具体的な計画ではないが、一つのきっかけになればよいと考えている。

黒木委員　　東京都民の関心をひくような取組みになるとよい。

佃委員　　オリンピック・パラリンピックの事前キャンプはうまくできるとよいが、そもそも施設が十分にあるのか。

事務局　　施設面でも様々な課題があるが、うまく進められればよいと考えている。

佃委員　　どのくらいの期間を考えているのか。対応を考えるのはオリンピック・パラリンピックの何年くらい前からなのか。

事務局　　まだ具体的な話は何もないが、本番の1か月前くらいをイメージしている。事前キャンプの期間中に、区民が施設を使えなくなってしまうことも考える必要がある。

黒木委員　　イメージが具体的になってからあらためて議論できるとよい。

森岡委員　　オリンピック・パラリンピックも、その先にどうつなげていくかが重要である。子

どもの国際交流に、リタイアした世代が協力できることもあると思う。さらに、世代間の交流を行うことで国際交流以外にも広がりが出てくるだろう。既に国際交流に取り組んでいる区民と協力していくことは難しいことではないと考えている。

話は変わるが、文京区のPRをするチラシで英訳されたものは、どこで配っているのか。

事務局　お祭り等のイベントのほか、一番多いのは、宿泊施設への配布である。そのほか、丸の内の施設、東京都の施設など外国人の方が多い場所に配布させていただいている。

森岡委員　観光もスポーツも国際交流も、オリンピック・パラリンピックという一つの機会で文京区をPRしていけるとよいと感じている。

佃委員　ものづくりを世界に発信しようとしている区もある。文京区でも、世界に発信できる明確なコンセプトがあるとよいと考えている。外国人など、人にサービスするという視点と、自分自身を表現するという視点の両方の視点で考えていけるとよい。

文京区をPRしようとした時に、区の中心となる街がなく、また、文豪についても海外には広く伝わりきらないと感じている。もう少しコンセプトの部分を考えていけるとよい。

金坂委員　オリンピック・パラリンピックについて、ホテルのキャパシティが足りるのかが少し疑問に思っている。この機会に多くの外国人が日本に訪れると考えている。区内の宿泊施設で限界があるのであれば、ホームステイの受け入れ意向などを区で調査してもよいかもしれない。

6. まとめ

事務局より座談会の議論の要点が説明された。

黒木委員　オリンピック・パラリンピックがチャンスということであれば、しっかりと情報を発信して区民を巻き込んでいけるとよいのではないか。

7. 総評

座長より以下の5点で総評がなされた。

1. 次回の分科会では施策の体系を事務局から提示していただき、中身を議論していきたい。
2. 情報共有、情報発信のメカニズムづくりに取組み、区民が積極的に関わりを持てる環境をつくっていけるとよいと考えている。これは、他の分野に横串を通すことにもつながることでもある。
3. 教育との連携について、アカデミー推進課から情報をうまく共有して橋渡しをしていけるとよい。
4. 生涯学習とも関わりがあると思うが、異文化交流と同時に多世代交流も考えていけるとよい。
5. 文京区をPRすることは都市外交を考えた時に重要なポイントになる。どう文京区をPRするかをしっかりと検討していきたい。

8. 閉会あいさつ

座長より開会のあいさつが行われた。

以上